

令和6年度 山鹿支部の取組

小中学校合同英語部会支部長 森 每恵（山鹿市立八幡小学校長）

1 研究テーマ

「小中連携を踏まえ、主体的な学びに向かう授業の創造」

- (1) 中学校:継続的な帯活動等の工夫による、基礎的・基本的事項の確実な定着
- (2) 小中共通:目的・場面・状況を意識した言語活動の工夫
- (3) 小中共通:CAN-DO リスト等を活用した、7年間の系統観を意識した授業づくり

2 本年度の取組

- (1) 第1回小中学校合同英語部会 令和6年5月7日 組織作り、研究テーマ・年間計画決定
- (2) 第2回小中学校合同英語部会 令和6年6月7日 アンケート項目の検討及び授業作り・帯活動及び言語活動の紹介(小学校・中学校の取組事例紹介)・各学年での授業づくり
- (3) 小中学校合同英語部会夏季研修会 令和6年7月23日
 - 講話「小中連携を踏まえ、主体的な学びに向かう授業づくりについて」
講師:県教育庁市町村教育局義務教育課 英語・日本語教育推進室 岡崎 卓 指導主事
 - 演習:(小・中学校別)課題を踏まえた授業作り
- (4) 第3回小中学校合同英語部会 令和6年10月2日 授業研究会からワークショップに変更
 - ・県中英研夏季会員研修の復講(釧路市教育委員会外国語教育アドバイザー平木裕氏の講話)
 - ・アンケート結果分析の周知及び今後の取組の具体に係る協議
 - ・今後の授業づくり(実効性の高い言語活動等について)
- (5) 第4回小中学校合同英語部会に向けた事前授業検討会 令和6年12月(小の授業に中の教員も参加)
- (6) 第4回小中学校合同英語部会 令和7年1月22日
授業研究会 授業者:多賀 智子教諭(大道小学校6年生)
Lesson 8 My Junior High School Life (Junior Sunshine 6 開隆堂)
指導助言:熊本県立教育センター 栗原 佳代 指導主事

3 取組の実際(目的・場面・状況を意識した言語活動の工夫) ◇鹿本小学校の実践より

- (1) Kamoto English Gateway Lesson 2 Welcome to Japan. (Junior Sunshine 6)

単元のゴール:ALTやCIRの方に日本の良さを伝えるために、日本の名物や名所、行事などについて、くわしく発表しよう。

① 授業の実際

①教師の日本紹介について話やALT、CIRの紹介を聞き、単元のゴールを理解する。

②お互いのお勧めを知り合うために、日本のお勧めを伝え合おう。

③日本のお勧めの良さが伝わるように、より詳しく紹介しよう。

④ALTやCIRに、日本の良さを伝えるために、実際に紹介する ★評価場面

⑤学習を振り返り、評価問題に取り組む。
★評価場面

Kamoto English Gatewayという国際交流学習に向けて、ALTやCIR(国際交流員)に向けて、日本の良さを伝えるという単元終末の言語活動を設定し、左図のように単元を計画した。単元全体として、毎時間の授業で言語活動を通して、英語を「使いながら学ぶ」という学習を大切にしたい。

② 成果○と課題●

○ALTやCIRに伝えるという目的をはっきりと持ち、意欲的に表現しようとする児童が多かった。

○ALTやCIRが熱心に温か

く発表を聞いてくださり、児童も安心して発表することができた。

○専科教員の兼務3校の児童が相互に発表を聞くことができ、自分の発表をよりよくしようと調整する姿が見られた。

○発表の機会が違う相手に複数回あったため、回を重ねるごとに、自信を持って堂々と発表する姿が見られた。

○お礼の手紙を英語で書こうと、家族に聞いたり、タブレットで調べたりして書く児童が複数名いた。

●兼務校、ALTやCIRとの日程調整に時間を要した。

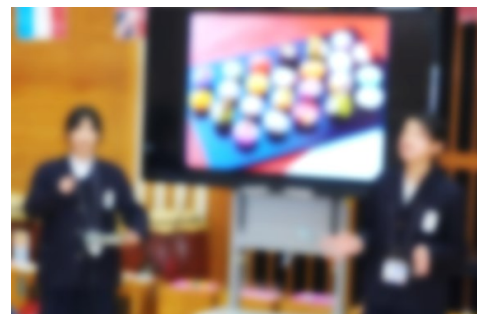


図1 CIRに向けて発表する児童

- 同じ発表を複数回行ったが、よりよい発表に練り上げられた児童がいた一方で、中間指導後も間違っただまの表現が訂正できない児童がいた。児童の意欲や関心を維持したまま、どのように間違いに気付かせ、訂正させていくか工夫が必要である。

(2) Lesson 8 My Junior High School Life (Junior Sunshine 6)

単元のゴール：中学校の先生に自分のことを知ってもらうために、中学校でがんばりたいことを英語で書いて、中学校の先生におくろう。

① 授業の実際

①中学校の紹介を聞き、必要な新出語句に慣れ、単元のゴールを理解する。

②自分のことを知ってもらうために、中学校で頑張りたい教科、部活、楽しみな行事等を伝える。(乗り入れ授業)

③自分のことが伝わるように中学校で頑張りたいことについて書き写す。

④お互いのことを知るために、中学校の先生への手紙を読み合う。

⑤中学校英語担当教員に渡す。
(学校によっては、春休み中に引き継ぎ連絡会)

6年教科書の最後の単元で、中学校の先生方に自分のことを知ってもらうために、話したり書いたりするという明確な相手意識や必然性を持たせることができる終末の言語活動を設定した。「書く」ことを単元の最後に行うが、それまでに音声で十分に慣れ親しみ、言えるようになってから文字につなげられるようにした。

② 工夫点

- ・単元の最初の中学校の英語の先生方からのメッセージ動画
- ・目的意識・相手意識を明確に持つことができるよう実際に中学校の先生方に伝える場を設定(研究授業、乗り入れ授業)

③ 成果○と課題●

- 中学校の先生に実際に伝える場を設けたので、児童は緊張しながらもなんとか伝えようとする姿が見られた。
- 中学校の先生方に褒めていただくことで、自信を持ち、安心する様子が見られた。
- インタビュー活動中に、自ら中学校の先生に英語で質問をする児童も多く、日頃のsmall talkやパフォーマンステストの成果を生かすことができた。
- 中学校の先生方に見ていただくことで、普段以上に丁寧に意欲的に書こうとする姿が見られた。
- 日常の授業における児童の実態を中学校教員に実際に知ってもらうことで、小中連携の視点から、共通の課題認識に基づいた共通理解や共通実践に繋げることができた。

- 一小一中の校区では日程調整や事前打ち合わせを行いやすいが、そうでない学校は日程調整等が難しかった。今後はタブレットによるアンケート機能などを用いて日程調整をしたり、事前打ち合わせをオンラインで一括して行ったりするなど工夫したい。

4 まとめ

本年度は、研究テーマに基づく実践における児童生徒の変容を測るため、各学校でアンケートを実施し、集計・分析結果を共有することができた。研究授業前には、小・中教員合同の事前研を行い、様々な立場で意見交換できたことが、小中連携を推進し、児童生徒の主体的な学びを育む一助となった。

今年度も、英語専科が兼務しながら市内全小学校に勤務するという山鹿市の特色を生かし、各中学校校区で専科教員を中心にした小中連携を行うことができた。また、日頃から目的・場面・状況を明確に設定した言語活動を大切にして授業を行った。英語が好き、分かるという児童を育むため、本年度の成功体験を来年度も継続していくとともに、さらに発展させていきたい。

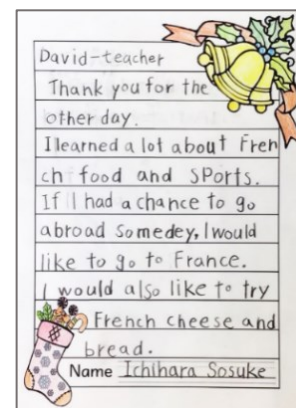


図 2 児童の感想

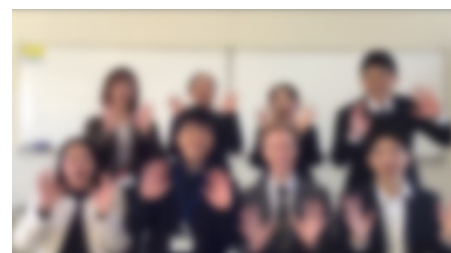


図 3 中学校の先生からの動画

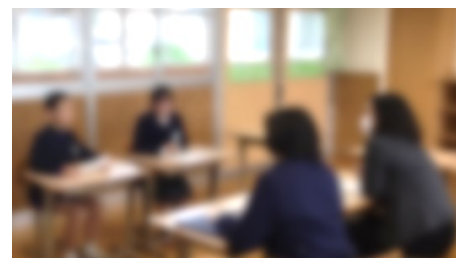


図 4 中学校の先生と話す児童

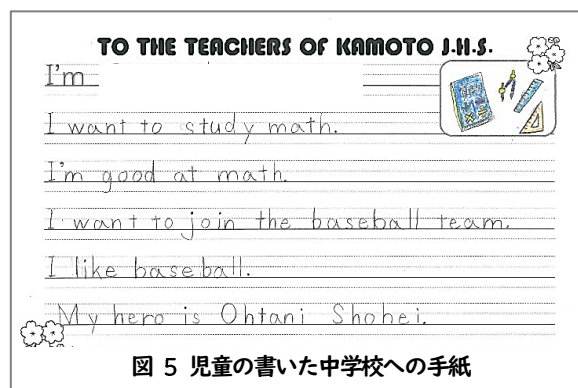


図 5 児童の書いた中学校への手紙